

東葛菜の花『市民公開講演会』

東葛菜の花
「高次脳機能障害者と
家族の会」

本講演会は「高次脳機能障害の理解、周知をすすめるため」に東葛菜の花「高次脳機能障害者と家族の会」が主催し、事前の新聞報道もあって200名を超える方が参加されました。

「日々コウジ中」で知られ、当事者家族である柴本礼氏の講演「当事者へは居場所を 介護者へは支えを」と、地域の支援者によるパネルディスカッション「高次脳機能障害者の居場所と生きがいを見つける」と充実した内容に参加者の満足度も高い講演会となりました。(なお、アンケートの質問に対する講師からの回答が「東葛菜の花」のホームページに掲載されていますのでご紹介します。) <http://toukatsu-nanohana.com/>



家族会のかつどう

2019.2.25
佐倉市志津市民プラザ1F

C'sこ～じのうカフェ

2月25日の「C'sこ～じのうカフェ」に参加しました。C'sこ～じのうカフェは、毎月第4月曜日13時30分から佐倉市志津市民プラザ1F C'scafeで行われています。<ちば高次脳機能障害者と家族の会>と<VAIC-CCI>の協働です。25日は当事者・家族が18名参加していました。家族は日頃当事者の行動や言動で苦労されていることを語り合い、時折、スタッフに相談していました。当事者同士も楽しそうに話をしていました。みなさん日頃病院でお会いする時より、ゆったりと笑顔で話されているのが印象的でした。コーヒーを飲みながらリラックスして自由に交流する場所の大切を実感しました。

ちば
高次脳機能障害者
と家族の会

編集後記

今年度も広報誌「こ～じのう掲示板」をご愛読下さり、ありがとうございます。個人的にはあちこちとお邪魔した先で多くの出会いがあり、大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。平成も間もなく終わるこの一年は様々な思いを振り返りながら過ごした方も多かったのではないのでしょうか？元号が変わって気分一新して、チャレンジできたらと思います。引き続き、高次脳機能障害支援へのご理解、ご協力のほど、宜しくお願いたします。(三代目O)

平成最後の37号はいつもより少し早い発行です。年度末にいつもあたふたして編集しているYは早くから取り掛かりました。原稿もみなさんに急かせてしまいました。無事発行ができましたこと感謝いたします。平成もあとわずか。平成は災害が多かったともいわれています。元号が変わっても災害の備えは怠らないようにしたいと取材を行って感じました。来年度で情報誌は18年目に突入。変わりなく情報を発信し続けます。みなさま、『こ～じのう掲示板』をどうぞよろしくお願いたします。(Y)

こ～じのう 掲示板

2019.3 vol. 37

発行日 2019年3月22日
発行 (社福)千葉県身体障害者福祉事業団 千葉県千葉リハビリテーションセンター
千葉県緑区誉田町1-45-2 043-291-183(代) 内198
発行責任者 高次脳機能障害支援センター センター長 小倉由紀
<http://www.chiba-reha.jp/> ホームページからご覧いただけます



こ～じのう

掲示板



こーちゃん
こ～じのう掲示板キャラクター

37

2019.3

特集 障害者と災害
支援センター便り
全国の動き・イベント講習会報告など

こ～じのう掲示板は千葉県千葉リハビリテーションセンターや千葉県、全国の高次脳機能障害に関する情報を紹介する広報誌です

菜の花メッセージ



「小さいことから始めよう～災害に備えて～」

千葉県千葉リハビリテーションセンター
地域リハ推進部
部長 田中 康之



皆さんは何か「災害」への備えをしていますか？ここ数年、地震・大雨・台風など、日本はどうにかなってしまったのか？と思うくらいです。その度に言われることが「平時の備え」の大切さです。「平時にできたことしか非常時にはできない」と言われています。家族との連絡方法、自宅付近の避難場所、いざという時に誰に頼ったら良いのか、自分のカラダやココロのことを周囲に理解してもらう術など、家族や支援者、さらに同じような立場の人同士で話し合うことから始めることが大切です。

災害によって崩れてしまった日常生活をリハビリテーションの立場から取り戻すための体制作りが始まっています。千葉県でも千葉リハビリテーションセンターが事務局となり、県内の様々な組織や機関と協力して支援体制の構築に取り組んでいます。ここでも、平時の個々そして地元の自治会や同じような立場の人の集まりである当事者会や家族会の取り組みが一番という話題になるのです。小さなことでも構いません。何か一つでも取り組みを始めましょう。ちなみに私はアルミシートのブランケット、レスキューホイッスル、カロリーメイト、ラジオ、常備薬、通信用バッテリー類などは常に持ち歩いています。子どもが小さかった時はスティック状の粉ミルクを4、5本は入れてました。備えあれば憂いなしとは昔の人はよく言ったものです。ちょっとした準備が後々大きな差につながります。

ちょっと耳より情報

災害が発生したときにどうしよう？ と思っている方も多いと思います。いろいろな機関・組織のホームページには参考になる情報がいろいろと掲載されています。私が見た中でもこれは結構おすすめ！と思うサイトを紹介します。一度アクセスしてみてください。
「NHK災害時障害者のためのサイト」
「高次脳機能障害のある方のための災害時初動行動マニュアル」
「災害時の発達障害児・者支援について」
それぞれ、右のQRコードからもアクセスできますよ。



NHK災害時障害者のためのサイト



高次脳機能障害のある方のための災害時初動行動マニュアル



災害時の発達障害児・者支援について

高次脳機能障害支援者普及全国連絡協議会

2019.2.22
大手町サンケイプラザ

今年度第2回の全国連絡協議会が開催され各地の取り組みが報告されました。報告はブロックごとに行われ、関東甲信越ブロックは担当県である神奈川県が各県の実績の中で「特に力を入れたこと」と「課題」を中心に報告を行いました。全国的に様々な地域の事情に応じた創意工夫された取り組みのなか、「自動車運転再開」、「小児期発症者」や「社会的行動障害」への支援が多く、この県で重点的に取り組まれていました。報告後の質疑応答では、「画像所見がない場合の事故による頭部外傷への補償が裁判で認められない事例が多く、対応を国に求める」ことに対し、国リハからは「症状、原因がある場合、画像所見がなくとも診断が可能」との説明を行い、このことを広める必要を認めた。また、「受けてきた評価や支援をわかりやすくまとめ、次の支援者に引き継ぐためのノートの全国統一版の作成」の提案について、国リハからは「各地で使用されているノートの情報を集め、提供する」ことで対応すると説明。「全国のノートの情報を国リハ情報・支援センターに送ってほしい」と述べた。



高次脳機能障害支援コーディネーター全国会議・シンポジウム

2019.2.22
大手町サンケイプラザ

講演ではアンガ - マネジメント(高次脳機能障害と怒り)について鹿児島県厚地脳神経外科の臨床心理士伊地知大亮先生よりお話を伺いました。「社会的行動障害の一つとして感情や行動を自分で調整する事が難しくなる状態(意欲・発動性の低下、対人関係の障害、依存的行動、固執、感情コントロールの障害など)些細な刺激に反応して他者に攻撃的になったり、衝動的な行動を取るなどして、家族や支援者も巻き込んでしまうことがある。アンガ - マネジメントでは怒りの感情を取り除くことではなく、怒りの結果として現れてくる攻撃行動を未然に防ぐこと」であり、「自分の感情や考え、身体的反応に気づくことで自己コントロールが出来るようになること」を目的としていること、患者と家族との関係も影響しやすいとの話がありました。また、福岡県や障害者職業総合相談センター、東京都港区の家族会の活動報告などがありました。



透き通る淡い青空と近代的なビル。レトロな建物は懐かしくも新鮮な気持ちにさせてくれる。

高次脳機能障害支援センターの近況や支援活動などを報告します。

2018.12.6-7

日本高次脳機能障害学会学術集会で発表しました!

潮の香りと異国情緒が漂う街並みの神戸市で、第42回の高次脳学会が開催されました。今年の学会演題は295題、千葉リハからは口演と7題のポスター発表をしました。そのうち支援センターからは4題のポスター発表をしています。今回の支援センターだよりは、発表した4名の演者と参加者1名の報告を掲載いたします。



日本高次脳機能障害学会ポスター

『他医療機関からの運転評価紹介の傾向と課題
～高次脳機能障害者の自動車運転再開～』 小倉由紀

当センターは高次脳機能障害支援拠点機関として、自動車運転再開支援に10年近く取り組んできましたが、年々他医療機関からの外来紹介が増加しています。紹介患者は運転再開割合が当センター退院患者に対して2割低い結果でした。支援拠点機関として境界例や困難例への対応を行う役割がある一方、各地域で実事評価を含めた評価・支援体制をどう構築するかが喫緊の課題となっています。

『高次脳機能障害者に対する生活版
ジョブコーチ(生活版)JC支援
～ヘルパー支援の課題～』 揚戸 薫

生活版JC支援は実際の生活場面で訓練し援助する訪問型の支援手法で、高次脳機能障害者に有効とされます。この手法を用いてヘルパーに繋ぐ中で、ヘルパーは「介助」が主体で見守りや間接指示の経験が少なく「介助」から「自立への見守り」という新しい支援に認識を変える事が必要だという事が分かりました。この支援を広める為に研修会を開催し多くの反響を頂いた事を報告し、会場からはこの発表に興味があり聞きに来た、等反響がありました。

『高次脳機能障害者の地域活動移行における課題
～高次脳機能障害支援センター集団活動を通して～』 前島潤子

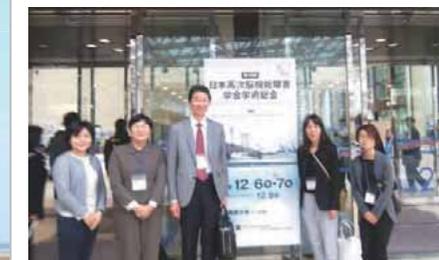
当支援センターでは生活期の高次脳機能障害者に対し、地域の支援と繋がるための支援の一環として集団活動を行っております。その現状や課題について発表しました。日頃の取り組みをふりかえることで、支援の有用性や必要性を改めて実感しました。参加者から利用者の障害特性の差異に関する質問を頂き、高次脳機能障害者の多様性を再認識すると同時に、当支援センターだからできること、取り組むべき責務を再認識する非常によい機会でありました。

『青年期の当事者がもつ社会参加に向けた課題と支援
～レディネスグループプログラムの報告～』 小菅倫子

本グループは、青年期の当事者と家族に対し、社会人として働くための下準備を目的として行う集団活動です。作業体験と事実に基づいた丁寧な振り返り、家族支援を併行することで、当事者と家族に行動変容がみられたという結果を報告しました。会場からは、障害特性だけでなく青年期特有の発達課題にどう対応するか、家族と支援者の役割分担について等多くの質問をして頂き、青年期の方への支援について関心の高さがうかがえました。

学会に参加して 田中葉子

全国の高次脳機能障害の支援に関わる医師やセラピスト、福祉職などの多職種による特別講演やシンポジウム、セミナー、口演やポスターでの発表が行なわれました。当センターからも発表させて頂き多くの意見や感想を頂きました。医学的な研究や実際に地域での支援、当事者の声を聞かせて頂き、多くの事を学ぶ機会となりました。今回の学びを今後の支援に活かして行きたいと思います。次回は宮城県仙台で開催予定です。



学会理事長の三村先生と記念撮影(左から3番目)

天災はすべての市民に平等にやってきますが、人的被害は平等ではありません。東日本大震災で亡くなった障害者の死亡率は、被災地住民全体の約2倍に達した調査結果があります。このことから障害を持つ人たちは、見えにくい障害と言われる高次脳機能障害の当事者、家族は、何をしなければいけないか考えました。37号の特集は、災害支援団体、C-RAT(シーラット)事務局の方から話を伺い、今できることを体験した内容を紹介いたします。NHK調べ2012.9.5

C-RATってこんなことをしています



平成30年度九都県市合同防災訓練の参加者集合写真

C-RATってなに？

災害時のリハビリテーション支援を行う団体です。全国組織としてJRATがあり、C-RATは千葉県版の地域JRATとして連携をとっています。災害時、訓練時にはJRATのマークが記されたビブスを着用して活動します。医師・看護師・理学療法士・作業療法士・ケアマネジャーなど多くの職種から構成されます。(2015年9月組織化)



災害時のリハビリテーション支援って？

住まいをはじめとした生活環境が大きく変わってしまう災害時。災害リハビリテーションは、被災された方が避難所等でもそれまでの日常生活に近い状態に戻れるように支援する活動です。2016年4月熊本地震では、全国のJRATが支援しました。C-RATからは6施設より10隊39名を熊本に派遣。写真はその時に、活動記録として撮影されたものです。



災害時の避難所や車中泊者へ呼びかけ避難所住民の集団体操などを行います



生活不活発病を予防し、エコノミークラス症候群を防ぐため支援をします



避難住民を支える支援団体が集まって、情報交換のミーティングをしています



車中でも避難生活がしやすいようにアドバイスします



どんな活動をしているの？

災害リハビリテーションやJRAT、C-RATはまだ一般的には知られていません。そのような状態でJRATの支援者がいきなり避難所に行っても、避難住民や行政職員は戸惑ってしまうので、日頃からの周知啓発活動が大切になってきます。(災害支援団体も普段からの備えが必要なので)防災訓練に参加協力することで住民や行政に災害リハビリテーションについて知ってもらったり、研修を開催することで行政や関係団体の皆さんに我々の活動の理解を促したりしています。



防災訓練のひとつコマ

森田知事
に説明する
市長代表



- ・避難場所やその経路の確認(外出先での被災についても考えましょう)
- ・家族不在時にどういった支援が必要かを周囲に知ってもらう手段
- ・家族が本人や支援者等との連絡手段(携帯電話は通じにくくなります)
- ・福祉避難所にはどのように入れるのか
- ・隣近所からの支援はあるのか
- ・民生委員とはつながっているか
- ・自治会の自主防災組織とはつながっているか
- ・行政の支援は届くのか

検討事項の例

災害は忘れた頃にやってくると言われますが、近年では「いつでも」やってくると言えるでしょう。また、障害の有無に関わらず、分け隔てなく襲ってくるのも災害の特徴です。災害が発生したその瞬間〜1時間後に生き延びて避難できること、次はライフラインの途切れた避難所や自宅であるべく健康的な生活ができること、を具体的に想像してみよう。...いかがでしたでしょうか。不安な点がいくつも浮かび上がってきたかと思えます。そのひとつひとつを潰しておくことが災害に対する備えになるはず。例えば、□枠のようなことについて検討しておくか良いかと思えます)災害への備えは、「リアルな想像力」を働かせ、新聞・テレビ・ラジオ等で言われているような一般的なことから手を付けて対策を立てましょう。その後、要配慮者・高次脳機能障害特有の項目について考えてみると整理しやすいかと思えます。

C-RAT事務局 後藤

コメントをいただきました



防災、わたしができること

C-RAT事務局に取材を通して、登録、家族との確認など、わたしができることを体験してみました。

あくまでも「私」の場合、自治体によって異なります。

1 登録に行ってきた



登録できる障害の種別は決められています。また障害者手帳の等級も定められていますので、登録を希望される方は、市のホームページで確認してください。名簿に登録されると、避難支援が必要な対象者とされ、町内自治会、警察、社会福祉協議会などに申請書に書いた情報が提供され、発生時の対応にいかされます。

避難行動要支援者名簿申請書
災害が起きたとき、車いすユーザーは自ら避難することがあります。水害、地震で道路が寸断されたり、家から出られない状態になったときです。居住する千葉県市では避難困難者に向けて『避難行動要支援者名簿』を作成していると知り、最寄りの役所に登録に行きました。



申請受付は高齢障害支援課で

役所では防災マップ資料をいただきました。また高齢者・重度障害者の方に向けて家具や家冷蔵庫などの転倒防止金具の取り付け費用の一部を支援していることも教えていただきました。



防災マップは役所でもらえます

2 家族と確認をする

連絡方法、避難所の確認、避難経路を再確認。支援者名簿に登録されていても、大規模災害発生時にはすぐには支援が届かない場合を考え、ご近所とのコミュニケーションを図るよう話し合いました。

体験をして感じたこと

今わたしができること、災害が起きる前にできること。自宅では食品・飲料水の備蓄、簡易トイレ、薬などの用意はしていましたが、C-RATの方からお話を伺い、行政との繋がり、支援などを知る貴重な体験ができました。今回の想定は自宅被災した場合で、外出先で被災した想定は考えていません。わたしの場合、外見から障害を持っていることがわかります、助けを求めることもできます。外見から障害がわからない、また、助けを求めることもできない高次脳機能障害者の場合、自分の障害を他の方に知ってもらう手段として、『ヘルプカード』を持っているといざというときに役立ちます。体験をして感じたのは人の繋がりの大切さです。自分を守るため、世界でたったひとつのヘルプカードを作ってみてはいかがでしょうか。



ヘルプカードを作る



役所や千葉リハで配布しています

今号の特集は災害、自然災害はいつ起きるかわからない状態なのに、備えについてはいついかなる時に起きても北海道で大きな地震が起きています。今すぐに何が出来るか、特集で取り上げます。

第17回高次脳機能障害交流会

2019.3.2
in 千葉リハ

災害は忘れていてもやってくる
～災害の備えを考えよう～

全体会 13:05-14:05

今年の交流会は東日本大震災で被災された家族会の方を講師にお招きして『東日本大震災時の家族会活動を通して学んだ事』の講演をしていただきました。講師の堀間氏はあの日、岩手県の高次脳機能障がい者支援普及連絡協議会に出席するため、エスポートいわてにいました。大きな余震が続く中、どこでなにがきているかまったくわからないまま度重なる余震で、外に出たり、中に入ったりを繰り返していたそうです。

堀間氏は、震災当時の様子ど「あれから8年」として現在の状況と家族会としてできることをお話しされました。

堀間氏の講演は、会場の参加者に災害について改めて考えるきっかけとなり、アンケートからもその様子が伺えました。「防災意識が高まった。高次脳機能障害者について、当事者とのかわりについて知ることができた」「体験者の生の声なのでとても参考になりました。高次脳機能障害も突然の「災害」本当にそう思う」「これを機に災害に備え、備品をそろえ直したり、家族の連絡方法を話し合おうと思いました」



参加者93名

講演を拝聴する参加者(3/2、千葉リハ大ホール)



講師:堀間 幸子氏
いわて高次脳機能障がい者の会
イーハートヴ代表



分科会 14:40-15:45

今年度の分科会は『当事者レクグループ』『家族グループ』そして新しく作った『当事者グループ』の3種類のグループに分かれて行いました。分科会に参加された方は69名。新グループの当事者グループの参加は16名で、多くの方が災害の話について「話が聞けて良かった」「備えることが必要」とお話をされていました。当事者だけの話し合いということで、災害だけに留まらず日頃の悩みを打ち明けたり、これまでの経験や心の内を話し合えた場となりました。家族グループは40名、5組に分けたことで、「少ない人数で話ができ良かった」との好意見をいただきました。当事者レクグループはポッチャを行いました。13名と人数はいつもより少なめでしたが、例年通り大変盛り上がりがありました。

参加された皆様、お疲れ様でした。今後も当事者、ご家族との交流の場を開催いたしますので、よろしくお祈りします。



分科会の家族グループ



ポッチャを行う当事者レクグループ



第15回高次脳機能障害リハビリテーション講習会

高次脳機能障害者の地域支援

2019.1.12 13:00-16:00 千葉市文化センター



参加者 142名

シンポジウムより

野々垣睦美氏

講演会・シンポジウムの二本立てで開催された15回目。講演会は野々垣睦美氏を講師に迎えました。7 割近くの方が初参加と知り、開催側としては喜ばしい限りです。当日の様子はいただきましたアンケートから抜粋して紹介いたします。講演会「具体的にどうも分かりやすい」事例をもっと聞きたい」「実際の生活に生かしていきたい」シンポジウム「佐藤氏、角田氏の内容は大変よくわかりました」「困難な課題を少しでもサポートしようとする考えに触れられて良かった」「その他」小雨降る寒い日あだだけの人数が参加したということはどういう講習会を必要としている人が多いのだとわかった」講習会の必要性を強く感じた日でもありました。

第3回日本安全運転・医療研究会
近未来社会におけるひととくるまの共生

2019.1.27 一橋大学一橋講堂



『近未来社会におけるひととくるまの共生』をテーマに警察-医療-教習所-企業と様々な立場から取り組みや展望の話がありました。技術進歩により、安全運転を直接的に妨げる機能、運転するだけで傾向が把握できる評価機能、眠気を検知し日常生活と運転時の2面からアプ ロチできる機能など、近未来に普及するであろう機能の紹介がありました。当センターからは4演題発表があり、聴講者から質問を受け熱く活発な議論がなされました。その他にも多くの運転支援の取り組みが発表され、運転支援への関心の高さが窺えました。

第2回高次脳機能障害就労支援研修会

「働きたい」を支援する。
～高次脳機能障害 その特徴と就労支援～

2019.1.25 13:30-16:30 市川市全日警ホール



参加者 178名

今回は市川市を中心としたエリアの支援者を対象とした研修会を開催しました。千葉リハからは、高次脳機能障害についての基礎的な知識の講義と、高次脳機能障害支援センター・更生園でそれぞれ行っている就労支援についての講義を行ないました。さらに地域の事業所として就労支援を行なっているビルドの方から、事例を交えての講義がありました。高次脳機能障害をお持ちの方が就労するにあたり、どのようなステップを踏むことが必要か、各ステップでの支援のポイントは何かを学ぶことが出来る貴重な機会となりました。

第1回小児高次脳機能障害支援者向け研修会

2019.2.23 13:00-16:00 千葉リハ リー・ジョンソン



参加者71名

「小児高次脳機能障害プログラミングプロジェクト」と高次脳機能障害支援センターの共催で「支援者向け研修会」を初めて開催しました。前日に全国連絡協議会が開催されたこともあって、千葉県内はもちろん、北海道から九州まで71名の支援者の皆様にご参加頂きました。研修会は医師、ソーシャルワーカーによる「小児高次脳機能障害概論」と、セラピストによる「リハビリテーションの実践」の二部構成。質疑応答では全国各地の取り組みの現状と課題、悩みも織り交ぜた交流を行うことができました。本研修会はこれから年1回、テーマを変えて継続開催する予定です。